

目的 学校教育における住居領域の学習は、今の日本の住居事情を考慮した有意義な内容でなければならぬが、これまでの調査では教師側の要因もさることながら、適当な教材がないということに軽視される傾向にあることがわかっている。我々は数年前からこの点に留意し、特に高等学校の住居領域の、空間を教室に取り込む手法の開発に取り組んできているが、本研究では、開発教材を現場で実施し高校生の反応等を収集し、本教材の高校教材としての教育効果やその妥当性を中心に分析・検討することを目的とする。

方法 上記目的を達成するために、京都府立N高等学校2年生女子生徒を対象に、開発教材を使った授業を実施し、終了後アンケート調査を行った。調査項目は、所要時間・教師からの助言の有無・難易度・作業方法・課題に対する感想等がある。また、提出課題については基本的な居住ルールである食寝分離・就寝分離・人体寸法等7つのチェック項目をもとに採点した。そしてアンケート結果と課題の完成度から、本教材の教育効果やその妥当性について検討・考察した。

結果 N高校2年生女子を対象に本課題とアンケートを実施した結果、①課題提出数241枚、アンケート回収数236票であった。②所要時間は平均39.7分③平均点75.9点④作業方法についての評価は120名(49.8%)がおもしろいと感じ、つまらないと答えた者はわずか3%であった。⑤現実の生活に近い課題であるため生徒の取り組みは大変積極的であった。⑥これらの結果を通しこの種の教育手法が教育現場に比較的抵抗なく受け入れられ、しかも短時間でこの領域の教育効果を果たし得るといえることが確認された。